

伊藤博文公の戯詩

平成二十五年、歳は癸巳に在り、七夕の候、新喜樂大廣間にて、伴氏松屋京橋移轉を祝して、詩書の會催さる。

新喜樂と言へば、通常は近づき難き高級料亭なり。余 官にありし時、要人に倍席せし記憶はあれども、一階大廣間に導かれし記憶無し。

庭の一角に大なる石碑あり。讀まんとすれども、時既に黄昏なり。たちまちに家女照明を點燈して余に示せば、これなん伊藤博文公の書なり。

添へ書きに曰く。

喜樂 老女將 韓城に來る。勇氣 滿城を壓す。將に去らんとして、書を求む。筆を援りて 漫然としてこれを送る、明治三十九年、京城にて、とあり。

明治三十九年と言へば、初めて朝鮮統監府設置され、伊藤博文、初代統監として赴任せし年なり。伊藤はその三年後ハルビンにて安重根に暗殺さる。

詩は、

聞説阪東女將軍

聞くならく、阪東の女將軍

剛腰踏破三韓雲

剛腰にて、三韓の雲を踏破し

滔々雄辯驚人去

滔々たる雄辯 人を驚かして去る

又帶微醺翻舞裙

又 微醺を帯びて、舞裙を翻すと。

口語に譯せば、「聞く所によれば、東京の新喜樂の女將が、大きな腰を振りたて、朝鮮半島を踏破し、しゃべりまくつて、人々を驚倒させて去つて行つた由。また、ちよつとばかり御酒を飲んで、踊りををどつた由」ならん。

雅号は、南山老衲らうなふとある。おそらくは、伊藤公の雅號と言ふよりも、單にソウルの南山に住む老人の意ならん。南山は當時日本の要人の住みし地域なり。老衲は本來は老僧の意にして、既に老いて解脱し、かかる華柳の巷より來りし者とは無縁なるぞ、との諧謔を歌ひしものか？

如何にも明治の英雄らしき、豪放磊落にして諧謔に溢れたる詩なり。

平成二十五年夏

岡崎久彦